

下する。

しかし一度踏み込みたるこの地より一步も退らず。日の出ごろ敵もようやく断念したか砲声静まる。しかし、一寸頭を出せば敵狙撃兵が待つてましたと狙い撃つ。恐らく蠅がうるさくて仕方がない。

我が重機関銃陣地構築に支障を来たせり。故に彼の狙撃兵なきものにと小銃を取りて狙う。「必中あれ」と右食指一本に全精神を込めて引き金を引く。一瞬変な反動を感じ付近より「命中」の声を聞くと同時に、左頬に生温かき感じありたるに、右手を以て見るに尊き血。

さては「やられた」と思うも、意識明らかなり。落着きて見れば、小銃の命、照星頂がもぎ取られ、また我、右眼鏡小豆大の穴有り。考えるに撃発と同時に、敵の弾、飛び来り照星頂に命中し、照星頂左頬に弾は右眼鏡に来るものなり。眼鏡なくば無論右眼失明せるものなり。

この後、夫は後方に向かつて歩き出しましたが重い物は次々と捨てて味方の陣地にたどり着いたそうで

す。

野戦病院で手当を受けて東京に帰され、病院で破片を取りましたが、胸の骨に刺さったのは害が無いからと死ぬまでそのままでした。

尊い命が愛国の精神に燃えた若者達が、ソ連の新兵器の前にバタバタと死んで行く。今さらながら悲しく胸のつまる思いでした。世界が平和になる日の一日も早く来ますようにお祈り致します。

軍隊生活七年の青春

滋賀県 西村 安一

私は、二十歳で徴兵検査により、甲種合格となり、留守をしてくれる伯父と妹を残して、昭和十四年一月十日、敦賀歩兵第十九連隊第一中隊に入営しました。初年兵の生活、起床ラッパで起き、点呼、食事準備及び片付、演習訓練、内務班教育、兵器・被服の手入れ、検査を受け、点呼、消燈ラッパやつと一日が終り眠り

に、それは大変な苦勞でありましたが、今は思い出として懐かしく思います。

三カ月の一期の検閲も終り、同年兵は皆、北支、中支へと出動していく。私は下士官候補を受験して合格したので、集合教育のため、連隊に残るよう班長殿より命ぜられました。外地に行きたいと思ひ、「行かせてくれ」とお願いしたのでありますが、「命令が聞けないのか」と叱られ、集合教育を受けることになりました。

昭和十四年七月に、関東軍第一下士官候補者隊（関東州旅順）に入校することになり、宇治港を出発。その時に、山口県徳山市におります姉夫婦が、面会に来てくれ、大変有難くうれしく思いました。入校し、教育を受ける中でのこと、明治三十七、八年の日露戦争の、二百三高地攻撃と同じ演習を覚えてもらうことのことです。掘られた岩石ガラの塹壕を、匍匐前進して、手や膝が切れ血が出るのでひるんでいると、教官殿から

「おまえらの父や祖父はここを掘って前進、多くの

人が血を流し、戦死されこの地を占領されたのだ」とどなられ、涙を流して一生懸命努力しました。

そのような教育も終り、卒業することとなり、原隊復帰の命令で、旅順を出発、満州牡丹江省穆陵へと汽車で向かいました。同地に到着、歩兵第十九連隊第四中隊附班長として勤務、付近の警備に従事しました。

満州は冬ともなりますと大変な寒さ、耐寒演習の時、氷点下三十余度と猛吹雪の中を、私の小隊が連隊の尖兵となり行軍しているうちに夜になり、広野一面真っ白、道に迷い、空腹と寒さで倒れる者が多く、このままでは凍傷や凍死になる。

「身体を動かすよう、起きろ、手足の指を動かせ」と鉄帽をたたきどなって歩きました。各分隊長も兵隊をだき起こして身体をよせあつてどなりあう、それでも立つことが出来ないのです、もうだめだと思ひ、小隊長殿と私とで、各自の雑のうの中にある関東軍ようかん携帯食糧を食べよう命令しました。

食い終ると驚きました、元気に立ち上がり、足踏みをしだったので、凍傷には少しなりましたが、そうし

ていると捜索隊と会うことが出来、九死に一生を得たこともありました。

ソ満国境の近くでは、狼群の飛びあう中を歩哨巡察に廻り、冬には哨舎に帰り屋内に銃を立てかけて置くと、寒さのため銃全体が真っ白の氷となりました。歌にもあります、銃に氷の花が咲く。まったくその通りでした。

夏になれば、朝は三時ごろに明るくなり、二十一時の消灯後も明るく、窓に黒幕を張って寝るのです。それでも昼間の疲れでよく眠れました。

その後は、関東軍大演習が始まり、ソ満国境や、私等の駐屯地付近一帯に、大変な友軍部隊が配置され、私等も何時でも出勤出来る準備をして、待機しておりました。しかし大東亜戦争が始まり、それらの部隊も逐次移動して行きました。

私も二十四歳になり、昭和十七年二月四日に、教育總監部附陸軍歩兵学校勤務の命令を受け、同地を出発、一人で朝鮮の釜山港まで出ました。その三日間、汽車の中は満州の人、朝鮮の人ばかりで話も出来ず、車両

の入口に警乗歩哨が一人づついるだけで、何ともいえないさみしさとこわさが襲ってきました。哈爾濱、奉天で、汽車の乗換えするにも苦勞でした。

やっと釜山に着き、船に乗ったら日本の人がたくさんいて、話も出来、やれやれと生きた気持ちになりました。関に上陸、やっと日本に帰って来たのだと安心しました。やっぱり日本の国はありがたいなとつくづく思い、何か大声でさげびたい気持ちになりました。

下関を出発し途中故郷にもより、東京に着き、始めて皇居の前で拝礼し、靖国神社に参拝して、二月十一日、千葉県千葉市陸軍歩兵学校に到着、同日教導連隊第五中隊付となりました。

歩兵学校を少し説明しますと、日本全国の各部隊から士官候補生将校が臨時学生として入校し、教育を受けるところです。教導連隊は、日本全国の各部隊より選出された分遣の下士官兵と、学校付きの将校下士官により構成し、各中隊は専門に研究する。私の五中隊は射撃が専門でありました。それで毎日射撃の練習も大いに張り切ってやってまいりました。

二十五歳の七月には陸軍戸山学校の臨時学生として三カ月間分遣、その間毎日体操、剣道、銃剣術を繰り返し指導を受け頑張りました。その時一番苦手は水泳でありました。一度は溺れ、仮死状態になったこともありましたが、教官殿の指導と同期の方々の親切とで泳げるようになって、九月教導連隊に帰隊しました。それから、学校連隊の営内下士官の指導をしました。

二十六歳になり教導連隊本部附となり、毎日張り切った日々をすごしていましたが、昭和十九年頃より東京都およびその付近の都市が空襲を受け、その中でも営外居住を命ぜられました。

昭和二十年になり千葉市及び歩兵学校も空襲で焼かれました。この夜は二十一時頃、空襲警報が鳴りましたが、敵機は甲府へ向かいました。二十三時頃になって再度警報が鳴り、「千葉市上空旋回中」とラジオの放送と同時に私は下宿を飛び出し、自転車で学校に走りました。その道中焼夷弾が落ち、付近が焼けて学校に着いた時、校門からは校内に入ることが出来ず、裏の塀を乗り越えて校庭中央の本部（本部建物は全部焼

けている）に着き、命令を受けては伝達しておりました。

空襲も終り、校長閣下より「営外居住者は一度帰り、家族の安否を見てくるように」と命令が出て、私も下宿に帰ろうとしたが、焼け野原となり、どこがどうなのか、道すらわからず、やっとのことで下宿の付近に帰ったのですが、下宿の年寄りご夫婦はおられず、よもや焼け死んだのではないかと心配しましたが、町はずれの民家に無事避難しておられ安心しました。

それからの下宿は稲毛の民家にお世話になり、私物も全部焼かれ困りました。昭和二十年八月の終戦、天皇陛下の玉音、今でも耳に残っております。終戦残務整理のため十月二日まで勤務し、同日故郷に帰りました。

それからは、留守をしていくれた伯父も年を取り、妹も大阪の方へ行って、家は荒れ、金もなければ物もない、田畑も肥料がない、耕作も出来ず、それでも何とか頑張ってきました。

今年七十三歳になりましたが、その時々々の記憶も薄

れておりますが、思い出として書きました。

満州・シベリヤ・北鮮の思い出

滋賀県 黄地 誠 二

大阪の日立造船に勤務していた私は、現役兵として昭和十九年三月二十一日満州第八百九十三部隊入隊、門司集合の通知を受取ました。どこへ行くのかわからず不安でした。博多港より乗船、釜山上陸、汽車に乗り、初めて行先が佳木斯であることがわかりました。

二人兄弟の兄も同じ工兵で伏見工兵隊入隊、何回となく面会に行ったことを思うと大きな違いでした。佳木斯より歩いて五里、やっと部隊に着いた時、大隊長のいわれたことが

「夜は絶対外に出ないこと、狼が何時出るかわからないから」

とのこと。初年兵の始まりでした。

ソ満国境の林口の中隊本部にいた私は、昭和二十年八月八日は忘れることが出来ません。丁度その日は外出することになっていました。早朝大隊長より電話にて外出中止、直ちに戦闘準備に入るよう命令があり、一瞬耳を疑いました。不可侵条約も締結しておりソ連が参戦するとは思ってもよらぬことでした。直ちに重要書類を焼却、戦闘態勢に入りました。その時すでに戦車の音が遠くに聞こえ、ことの重大さを感じました。

中隊長より「命を預けてくれ」といわれ、爆薬を持ち戦車に突入玉砕攻撃の覚悟、いよいよこれで最期かと思いました。然しすでに戦車は前方に行き去り、危うく一命をとりとめることが出来ました。

五中隊では全滅の知らせも入り、私達六中隊はバラバラになって行動することになり、八月十五日の終戦を知ったのは八月三十日になってからでした。

その間はもちろん食べるものとてなく、草や木や食べられるものは手あたり次第食べました。水を飲んでいて気がつくところには馬が死んでいたこともありました。